実践研究助成

高等学校

研究課題

# 覚えたフレーズ使用を目的とした動画による場面作り

副題

| | |
|---|---|
| 学校名 | **上宮中学・高等学校** |
| 所在地 | 〒543-0037<br>大阪府大阪市天王寺区上之宮町3-16 |
| 学級数 | 62 |
| 児童･生徒数 | 2116名 |
| 職員数／会員数 | 158名 |
| 学校長 | 土井　博史 |
| 研究代表者 | 山原　明 |
| ホームページアドレス | http://www.uenomiya.ed.jp |

## １．はじめに

「授業を英語で」という賛否両論を巻き起こした方針は、二通りの解釈が可能である。一つは、教師が英語を使用して行う授業。もう一つは、生徒が常に英語を口にする授業。

この後者の解釈は、授業のあらゆる可能性を示唆する。これまで、生徒が暗しょうしてきた英文は、通常筆記テストでその活動が評価されてきた。授業内はもちろんのこと、朝礼や終礼で、このような暗記確認テストを行っている学校は少なくない。

一方で、「読む・書く・聴く・話す」の四技能のバランスを考えた場合、これまでの学校教育で行われてきた活動は、「読む・書く」に焦点が当てられてきたことは誰もが認めるところである。2006 年度のセンター試験にリスニングが導入された。このことによるプラスの波及効果は今や認めざるを得ない。教科書はもちろん市販の問題集には CD が付属していることが第一条件となる。リスニングを授業に採り入れなければ生徒のニーズを満たすことはできなくなった。

残りの「話す」活動についてはどうだろうか。

生徒が授業中に英語を口にする時間を考えてみよう。新出単語をみんなで一斉に発音し、教科書の本文などを CD から流れるネイティブの発音に続いてみんなで発音する。この種の指導方法しか私たちは知らない。現場の私たちは「話す」活動がどのような活動を指すのか、正直あまりわかっていない。もちろん、「話す」活動の最終目的は、「使える英語」であることに間違いはない。ただ、私たちが知りたいのは、そこにどのように生徒を誘導していけばよいのか、という具体的方法である。

そこで、「話す」活動の単純で効果的な方法を提示してみる。

大学入試対策で使用される構文を生徒に暗記させる。これを筆記テストで定着度を確認するのではなく、発話させる。単に発話させるのではなく、プロジェクターで投影した動画に対して発話させる。動画は擬似日常的場面を作ってくれる。この動画からの英語に対して記憶してきた構文フレーズが反射的に発話できることを目指す。これが、「話す」活動の第一歩となる。

使用機器は、プロジェクター、コンピューター、スピーカーの３つである。

これだけで授業が活性化

## ２．研究の目的

発話する授業を「遊び」の授業ととらえる傾向が生徒達にあることは否めない。生徒達は、大学入試の英語は、難解な文法問題ができないと解答不可能であると信じていることが多い。もちろん基礎的な文法項目は必要であるが、必要以上に細かな文法項目を教えると生徒達は勉強したように思うようだ。そこで、そのような多少難解な構文集を使用し生徒に暗しょうすることを求めた。難解な構文集を使用することで、大学入試を意識させることができ、その結果「発話」を生徒に重要課題として求めることができるのである。

これまでのように暗しょうした英文を書くことでテストするのではなく、発音させてテストする。多少難解な構文を使

用すると、書くことを面倒くさがり、暗しょうを嫌がる生徒がでてくることが予測される。しかし、発音させるテストを採用することによって、英語への学習意欲が湧き、予習などに積極的に取り組む姿勢がみられることを期待する。

さらに発話に関しては、ICT を使用することによって、黒板とチョークだけの教室が異空間となり、生徒一人一人が話す主体として自覚を持つはずである。動画が擬似日常場面を映し出し、それに向かって発話する生徒。集団で一斉に英語を読むことでは体験できないことが、学習意欲を高める一つのストラテジーとして機能するだろうことを期待したい。

## 3．研究の方法

高校１年生 68 人（2010 年は男子校であったので男子のみ）を対象とした。大手予備校が出版している市販の構文集から 50 フレーズを指定し、そのフレーズが答えとなるような英文の質問文を考えさせる。例えば、構文１は、

To the northwest of the continent of Europe lie two big islands.

（ヨーロッパ大陸の北西の方向に、大きな島が二つある。）

である。これは、MVS 型倒置の理解を目的とした構文である。

生徒には、このフレーズが答えとなる英文を考えてもらった。例えば、「二つの大きな島は、どこにあるのですか。」だとか、「ヨーロッパ大陸の北西には、何があるのですか。」、「いくつの大きな島が、ヨーロッパ大陸の北西にあるのですか。」などと生徒はさまざまな質問を考えてくる。生徒が考えてきた質問文を優先し、以下のような英会話が作られた。

A: What lies to the northwest of the continent of Europe? （生徒が考えた質問文）

B: To the northwest of the continent of Europe lie two big islands. （構文集のフレーズ）

厳密に言えば（入試問題の英会話問題を考慮に入れるなら）、倒置で答える必要性のある質問文を考えなければならないだろうし、代名詞化が必要なところは代名詞を用いなければならない。しかし、このような授業では、基本構文を口にすることが目的であり、Aの人が行う質問を厳密な流れの元に作成する必要はないと判断した。このような観点から言えば、50 フレーズの質問文の中で会話同士のズレが多少見られる質問文もできるかもしれないが、生徒が考えてきたことを優先することにした。

生徒が考えた質問文 A の 50 フレーズを動画に撮影した。とりわけ、英語に対して苦手意識を持つ生徒に動画に登場してもらうことにした。１人の生徒が４、５回動画に登場することも認めた。苦手意識を持つ生徒に質問文 A を読ませることにより、多少英語を得意科目だと認識していた生徒に刺激を与えることができる。自分よりも英語が苦手な生徒が、動画の中でスラスラと英語で質問文を読んでいると、焦りを感じるようである。

かなり明るい投影ができる

50 個の質問文 A を生徒が考え、動画に撮影した。英語の苦手な生徒も、撮影数分前には、緊張した面持ちで質問文 A の台詞暗記に励むことになる。この 50 個の質問文を順番にプロジェクターを使って黒板に投射し、構文集のフレーズを発音させる。黒板に投影された動画に登場するクラスメートが英語で質問してくる。それに対して、自宅で覚えてきたフレーズを即座に返す。

プロジェクターから黒板に投影するときに、教室の電気を消す必要はない。プロジェクターの性能が上がっており、電気をつけたままの明るさで十分に黒板に投影されたものを認識することができる。

構文集のフレーズを発音するのは、クラス全員である。１クラス 34 人全員が１時間に少なくとも１つの構文集のフレーズを口にすることになる。初めは、構文集の順番通りに動画を再生したが、慣れるに従って、構文集のフレーズの順番を入れ替え、最後はランダムに再生し、何番の質問文が来るのかわからない状態でテストをした。ネイティブスピーカーとの授業の様子よりも、緊張した生徒の顔がある。

１クラス 34 人全員が英語を口にする方法は、グルグルメソッドを参考にした。（靜、2009）このグルグルメソッドは生徒が一人一人前に出てきて発音し、発音後には自分の席に戻るという形式である。動画は黒板中央に投影されている。教室の真ん中の列に、黒板に向かって１列に生徒が並ぶ。他人が発音している間は、自習の時間となるが、構文のフレーズを必死で覚える自習となる。

## 4．研究の内容・経過

まず 50 個の質問文 A を授業で生徒達と一緒に考えた。案外、生徒達の発想は豊かで、いろいろな質問文を考えてきてくれていた。これまでなら、構文集のフレーズだけを覚えてテストされていた生徒達。無味乾燥だと思われていた構文集のフレーズを前に、日常の会話でどのような使用が可能なのか、各自が考えてきていた。

グルグルメソッドで発話をさせる

次に、出来上がった質問文 A の撮影に入る。あまり英語に関心がなかった生徒も、いざビデオカメラを向けられると、真剣な表情になる。この生徒の緊張感を利用し、撮影前にしっかりと発音指導をした。とりわけ、t, f, v, th などの発音をターゲットにし、生徒に意識させた。この質問文の撮影は、放課後に行われた。

いよいよ撮影した動画をプロジェクターで黒板に投影し、その動画に向かって構文集の英文フレーズを発話する授業となる。殺風景な教室にパソコンやプロジェクター、スピーカ

ーを持ち込むと、生徒も気分が高揚するようだ。クラスメートが黒板に映り、その発音を聞くと、どよめきが起こる。出演している本人も照れくさそうだが、意外と発音が上手くできている自分に満足している様子でもある。

当初は、英語を口にする恥ずかしさが見られたが、徐々にその恥ずかしさも消えていった。ある生徒に言わせれば、「英語を話している自分がかっこいい。」という。もちろん、暗しょうしてきた英文であるので、生徒自身の言葉ではない。しかし、英語を口にすることを厭わなくなることは英語学習において大切な出発点であると思われる。

機器のセッティングは慣れれば、３分くらいでできる。チャイムの鳴る前にクラスに赴き、準備すれば、チャイムと同時に発音テスト（グルグルメソッド）が実施できる。チャイムと同時に始めたとして、１クラス 34 人全員が１フレーズを口にし、このグルグルメソッド１周目が終了するのに約 25 分かかる。約 10 分以上残った時間で速読教材など有効に使用できる。

週３時間の授業であり、この構文集ばかりをやっているわけにもいかないので、２学期を中心にこの活動を行った。ただし、週３時間のうち週１時間は、動画を利用せず教科書に沿って授業を行った。

## ５．研究の成果と今後の課題

この高校１年生の２クラスは、昨年度中学３年生のときにも筆者が英語を教えていた。その当時も中学の構文集の暗記をさせた。その方法は、伝統的な文法解説を１文１文行い、黒板に矢印や色チョークをたくさん利用して解説をした。さらに、宿題としてノートに覚えるまで何度も何度も声を出しながら書きなさい、という指導をした。中学３年生当時の生徒にしてみれば、なかなか長い英文を覚えることができず、半ばあきらめていたことが思い出される。

今回は、違った。この授業の後に、アンケートを実施したが、63%の生徒が今後もこのような授業を望んでいること、71%の生徒が動画を使用すると構文が覚えやすいと評価していること、62%の生徒が動画を使用すると英語を口に出すことが多くなったと答えている。

**発音もしっかりと指導する**

生徒が読んだ英語の質問文をダウンロードできるようにすれば、生徒は自宅でもこの練習ができる。ただ、生徒が出演しているので、誰もがアクセスできるホームページなどにファイルをアップすることはできない。

もちろん、ホームページにパスワードをかけ、特定の人間しかアクセスできないようなファイルとして扱うことが望まれる。

## ６．おわりに

日本が英語を使用しなくとも１日を過ごすことができる国であるからこそ、英語の授業中だけでも生徒に英語を発話する機会を与えてやることが必要であるのではないだろうか。今回の研究を通して、動画(映像)が人を引き付ける不思議な力を持つことを改めて痛感した。生徒達が、無邪気に映りたがる気持ちを利用し、尊重することによって英語を口にする恥ずかしさがなくなってゆく。

英語など学習しなくても生きてゆけると開き直る生徒達も少なくない。ただ、新しいことばを学習することは、母語に対する意識の変化を及ぼすことにもなる。結果、美しい日本語を意識することにもなるであろう。

**参考文献**

静哲人(2009)『英語授業の心・技・体』研究社